



TITLE:

4月19日-第3回春季合同ハイキング  
に参加して

AUTHOR(S):

西森

---

CITATION:

西森. 4月19日-第3回春季合同ハイキングに参加して. 天界 1936,  
16(181): 274-275

ISSUE DATE:

1936-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167208>

RIGHT:

## 4月19日—第3回春季合同ハイキングに参加して

大阪 西 森 生

颯爽とハイキング！ 天文學徒も御多聞に洩れず自然の悠久境の探訪が好きで、櫻花爛漫の野山に自然美を探ぐり、見學會も兼ねて一日の清遊を娛むのは天文團體の事業として、親睦を圖る事業として誠に歡迎に値する。と今日の経験より聲を大にして叫びたい。

4月中旬になつて俄然天候不順が續き、17日・18日共に京阪地方は雨に洗禮されて、ラヂオの天氣豫報も明日の天候は樂觀できない。明くる19日待ちに待った今日を迎えてさしもの雨も夜半に止んだが、密雲の望遠鏡的裂目から旭日が一瞬射込むと言つた空模様、照るとも降るとも分らないが星の友と語らひつゝ、野山を越える爽快な空想には天候敢て意に介すべきに非ず。定刻に遅れぬ様にと天六新京阪前に駈付ける。驛前の雜踏に先づ度膽が抜かされた。

こんな處を雲集と呼ぶとすると星霧と言ふより、星雲と呼ぶ方が妥當かも知れないと妙に感嘆する。泳ぐ様に人波を掻分けて O. A. A. のバツヂ目標に探がし廻つて遂に數名の参加者と邂逅した。——全くこんな言葉が當筈まる——改札口から電車の中まで人に揉まれて角の取れた圓い人間になつたと思はれる頃、富田町に吐出されて郊外の涼氣に觸れて脊が伸びる。先着の京星會の綠色旗が風にはためいてゐる。あまり線路内に差込むと電車運轉手が安全信號と誤認しますよ。此處で一行17人勢揃ひし挨拶を交しつゝ、11時半阿武山へと坦々たる、然し變化に富んだ風景の妙味を賞でつゝ、早や隊伍は三々伍々に別れて鐵道路を越えると汽車・鐵道の話、満開の櫻が見付かると地上の花から天上の星へ、雲間洩れる陽光から日食の話にと話題は盡きない。廣野氏が携帯ラヂオ受信器を取出されて12時の時報を聞いて腹時計にも捻込む事を思出す。かくて13時阿武山地震觀測所に到る。所長佐々憲三助教授が一行を迎えられ、直ちに所内に案内され氣壓計、シンクロン時計、重力測定器よりキルヘルト水平地震計を始め、垂直・微弱・光電池式等の大小各式地震計の原理より測定方法等々詳細に説明され、地震觀測の意義・目的から地震學の現状も話され、引續き工作室にも案内された。同所の地震計は1, 2を

除く他全部同所にて設計製作された物で、室内の優秀な工作機械と清潔整頓振りに感嘆する。米と地震計は國産に限ると、1時間半所内に費して其の得る處計り難く大であらう。玄關にて伊達氏により記念撮影(口繪寫眞参照)される。

早や14時半となり折から晴れた雲間からうららかな春陽を全身に浴びて、遠く淀川を挟む南に展けた攝津平野を眺めつい、此處にて自參の辨當に各自舌鼓を打ち團欒の一時に春日遅々時の過ぐるのを忘れる。大阪支部の例のサインが蒐められ、百濟氏・池野君・廣野氏・津久井君・冬林氏と子息2人・伊達君・西森君(以上大阪)、高井君・窪田君・坂井君・田中君・佃君・佐々木君・草場君・高城氏(以上京都)と順次自己紹介が爲される。滿腹に元氣潑潑、勇躍一行は攝津耶馬溪にと出發する。ハイキングコースの指導標に沿つて阿武山・針伏山の山腹を半周して小徑に沿ひ、谷を涉り、間道を行き、見晴臺に小憩し、山の靈氣を掬しつゝ名にし負ふ小型耶馬溪に出る。白水滔々と岩石を這ひ飛沫を上げる處伏瞰して良く、また溪流の涼を胸に入れるも良く、此處で酒宴を開いたらと動議する御仁もある。小憩中に記念撮影されて再び出發する。此處よりは山徑も下る一方で一氣に山を降り切り、村落を數々打過ぎ一路高槻にと迫る。相も變らず天文雜話に芥川の櫻も氣付かばこそ、案内に8キロ米と發表されたのが實は12キロ米餘もある事も素破抜かれたりして高槻に到り、省線で歸阪する人々に別れ、京阪線で「さよなら」「さよなら」を交しつゝ京都・大阪にと車中の人となる。

懸念された天候も却つて歩く時は曇つて暑くなく、道も砂塵立たず泥もなく、清澄なシーイングに此處一帯を天體觀望の理想地と折紙付ける。

---

**輝く日本博覽會** 大毎東日主催、目下、甲子園で開かれてゐる博覽會には、科學館中に花山天文臺よりの出品がある。主題は

(1) 6月19日の日食

(2) 太陽黒點

の2つに分れ、それぞれ珍らしい寫眞や圖表等が陳列されてゐるから、會員は見學されたい。